

メガラの僭主政

芝川 治*

要旨

コリントスやシキユオンと時期を近くして、メガラにもテアゲネスの僭主政が出現した。メガラにおいても貧富の対立が激化していたのであろうか。その中でテアゲネスは貧民大衆を煽動して権力を掌握した。社会的対立の原因は不明であるが、それは社会構造を震撼せしむる程ではなかった。むしろ、ポリスには内訌は稀ならず。その中にて、偶々、野心家が抬頭したとの程度である。テアゲネスの支配は比較的短命であって、彼はさしたる事績も残さず失逐した。それは単なる暴政に畢ったか。僭主政の後も寡頭政や民主政が継起するのみ。「貴族政」より民主政への必然的發展などここにおいても見出し難い。

キーワード…テアゲネス、テオグニス、寡頭政

*大手前大学元教授

メガラの僭主政

メガラはテアゲネスの僭主政を経験した。本稿ではその前後の国制史に顧慮を払いつつ、僭主政がメガラ社会に何を齎したかを中心として講究する。

一

テアゲネスに関する史料であるが、その少数なる事は吾人をして慨歎せしめる程である。その僅の一つとして、先ずトウキュディデス一卷一二六。これはキュロン事件を語る条である。アテナイのキュロンは名門の出 *eugenes* にして有力者でもあったが、オリュンピア競技の優勝者ともなった。彼は、当時メガラの僭主たりしテアゲネスの女婿であったという。キュロンは僭主政樹立を企図して岳父より兵力を借用し、オリュンピア祭に際して蹶起しアテナイのアクロポリスを占拠した。キュロンはこの件には蹉跌したのであったが、爾後の顛末は周知の通りである。

オリュンピア競技勝利者記録⁽¹⁾よりして、キュロンの優勝年次は六四〇年である。該時期、彼は未だ弱年だったであろう。彼のクーデタは、オリュンピア祭の年であるから、六三二年頃に設定すべきであろうか。そうすれば、テアゲネスにつき概略の年代は得られる。それによる権力篡取は六三〇年代前半頃であろうか。

彼の統治、長期に亘らずとは、通例、説かれるところである。これはアリストテレス『政治学』五卷十二章を典拠として仰ぐものである。この箇所は僭主政が長命ならざる事を説く。その中、例外的に持続したものが列挙される。シキユオン、コリントス、アテナイとシユラクサイである。メガラの場合はそこには算えられない。アリストテレスの挙例中、シユラクサイにおけるゲロンとヒエロンによるものが最短とされるが、それは十八年間継続したとされる。然らば、テアゲネスの支配はそれに満たなかつた事となる。それは僭主政全般⁽²⁾の撰に洩れず、比較的短期間にて終了した事となる⁽³⁾。

次に権力奪取の様相。これをめぐっては、先ず、アリストテレス『弁論術』1357b 33-36。ここにおいてアリストテレスは弁論術的推論につき思弁を巡すのであるが、この関連にて例証として用いられるのは僭主政と護衛兵なる問題である。シユラクサイのディオ

ニユシオス、こは護衛を要求すが故に僭主たらん事を計謀す。何となれば、以前、ペイシストラトスやテアゲネスもそれを要求し、それを得んかそれを楨杆として僭主の地位に就きしがため。かくして、ディオニユシオスの意中が例示によつて測知されるというものである。

これに関して先ずアリストテレス自身。彼にあつて僭主政を前期と後期に區別するが如き思考は欠如する。僭主政としてすべてが同一の相の下に把握されるのである。現に、如上『弁論術』において古期のペイシストラトス、テアゲネスと後期に属するディオニユシオスが同列に置かれるのである。この三名、アリストテレスにおいて、一種、觀念連合を形成するとも見られる。『政治学』においてテアゲネスがその名を引かれるのは五卷五章の一箇所のみであるが、そこにも彼はペイシストラトス、ディオニユシオスと一括して論じられる。かくして、アリストテレスの思考は一貫している。

先の範例中、ペイシストラトスへの護衛授与はアテナイの民会において議決された。彼が民衆を煽動して権力を略取したのは史実として承認するより他はない。この事はヘロドトスやアリストテレスが叙するのみならず、ソロンの詩篇なる同時代史料からも確証を与えられるのであつた。⁽⁵⁾ かく考察を進めるにおいて、現実においてテアゲネスが大衆煽動を行つた蓋然性は高きと化してこよう。

メガラの民会はデモン断片一九 (Jacoby) において語られる。往時、メガラ人はコリントス人の植民者 *apokoi* ⁽⁶⁾ であつて、多々、義務を負つた。メガラ人がそれを履行しなかつたが故に、コリントスの使節が来りてメガラ人をその民会において難詰したという。これに対してはメガラ人、憤怒を發し、使者に投石したとの事である。これに由つて観るに、大衆の意嚮が相当の重きをなした。民会 (デモンでは *ekklesia*) は国制上、相応の地歩を占めたかの如くである。⁽⁷⁾

ただ、デモンの信憑性には論難の余地がある。彼の断片をヤコービーは二一箇採録するが、それらよりして、古史に関して精細なる知識をデモンが有したか否かは判知し難いのである。民衆の政治的地位に関しては後述の過激民主政が参考を供す。昔時のメガラにおいてはそのようなものが成立したのである。これは民衆の政治的成熟を一定程度前提とするものである。また、この点はテオグニスの詩句よりも裏付を与えられる。⁽⁸⁾ かくして、テアゲネスは民衆煽動に奏功し、民会において護衛兵賦与を決議された事となる。これは確然たる事実とするより他はない。

二

然らば、大衆煽動を可能とした体制とは何か。これに関してはアリストテレス『政治学』五卷五章並びに十章。先に五章であるが、これは民主政の変革を論ず。ここで民主政は民衆指導者の放肆によつて壊残に帰する旨論ぜられる。それは寡頭政に変転したというのであろう。これに続き「然るに、古期において *epi de ton archaion* 同一人物が民衆指導者にも將軍にもなつた場合、民主政は僭主政に変化するものであつた。何となれば、古き僭主の殆ど大多数が民衆指導者より発するからである。」その例としてはペイシストラトス、テアゲネス、ディオニシオス⁽⁹⁾が挙げられる。またこれとは別に、ミレトスなどにおいては重要な役職より僭主政が出来した⁽¹⁰⁾とも説かれる。

この記事を瞥見するに、僭主出現以前の政体は悉く民主政であつた如くである。テアゲネスなどは軍事に熟達し、民衆の信頼を贏得してその地位を得た⁽¹¹⁾のである。現にラバルプ⁽¹²⁾はテアゲネス以前のメガラを民主政となしている。

さりながら、差当つて次の一点。アリストテレスはペイシストラトス、テアゲネス等を叙するに先立つて以下の如く記す。⁽¹³⁾「当時、ポリスは未だ大ならずして、民衆は仕事に忙殺されて田野に居住していた故に」。人口増大に伴つて中流、殊に下層民がその数を殖し、民主政進展を促進するという理論をアリストテレスとしては抱懐したと思料される。されば、少人口かつ農本的なるポリスにおいては最も穏和なる民主政、即ちアリストテレスの第一種民主政は成立するを得たであらう。然れども、優越するのは寡頭政とした筈である。⁽¹⁴⁾

他方、『政治学』五卷十章であるが、その論題は独裁政の解体である。ここにおいても疇昔の僭主政が筆に上せられる。⁽¹⁵⁾それらは一つには王から、また民主政において主要なる役に選挙された者、⁽¹⁶⁾或は寡頭政では枢要の諸役に選任された一人より発現したという。ここにおいて既に先程の五卷五章とは矛盾を来す。然る後に実例が示されるが、その中でペイドンはアルゴスの王であつた。イオニアの諸僭主やアクラガスのパラリスは榮譽ある役よりと記される。これは寡頭政よりの発生を物語るものであろう。⁽¹⁷⁾

その後、その名を掲げられるのはレオンティノイのパナイティオス、コリントスのキュペロスと共にペイストラトス、ディオニシオスである。それらは民衆指導より抬頭したとの事である。この箇所なるが、先行部分との接続が必ずしも円滑とはしない。これは王政、民主政、寡頭政よりの僭主発生を順に説くものではないからである。⁽¹⁸⁾ これは措くとして、パナイティオス以下の四名。レオンティノイの国制は、アリストテレスよりすると寡頭政であった。⁽¹⁹⁾ キュペロス以前のコリントスにはバッキアダイの寡頭政⁽²⁰⁾が布かれていた。ペイストラトスを遡るアテナイはソロン体制であるが、これはアリストテレス的には第一種民主政である。⁽²¹⁾ デイオニシオスを産んだシュラクサイは事実の上で民主政であった。⁽²²⁾

かく観ずるにおいて、僭主現出以前の国制はポリスによって区々様々である。『政治学』1310b 15-16 には、人口増大後の話であるが、民衆指導者は知名の士を讒謗して大衆的人気を博した旨、述べられる。かくなる事は、当然、寡頭政ポリスにおいてもなされ得る。それらより僭主発現したとされるのも異とはしない。⁽²³⁾ かくして、『政治学』五卷五章 1305a 7-28 は、アリストテレス的にも、必ずしも重用すべきではない。吾人としても、テアゲネス以前のメガラを民主政と断ずるには躊躇せざるを得ない。

パウサニアスの伝世するところであるが、メガラにおける王政はヒュペリオンによって終焉を迎えた。この王は貪欲かつ傲逸なるがため殺害された。かくなる王の行状を鑑戒として、向後、メガラは共和政体に転じた。役を選任し、それに遵う事に決した。アイシムムノスなる人物がデルポイの神託を伺い、その結果、英霊たちの墓所に評議所を設置したという。

これにはもとより伝説的色彩が付着する。されど、当初の国制は王政であったろう。バシレウス並びに *asimnatai* は後代⁽²⁵⁾のメガラ、並びにその植民市にて確認される。⁽²⁶⁾ これらにあつてバシレウスは役職であるが、それは古における王の残渣であろうか。アイシムナタイは評議会とは異なる。⁽²⁷⁾ その委員会の如きものであろうか。ハネルはそれをアテナイのプリユタネイスに譬える。⁽²⁸⁾ これは如上パウサニアスの記述とも関連せしめて、その淵源を古メガラに索められるものであろうか。⁽²⁹⁾ 時間的懸隔や他の難点を度外視してそれを承認するとしても、その権能、員数、就任資格等は明瞭とはしない。国制の如何を知るには役職に着目するのが有効である。この場合、アイシムナタイやバシレウスは十分なる判断基準を提供しない。⁽³⁰⁾

騒客テオグニス⁽³⁰⁾はギリシア本土のメガラに生を享けた。その盛期は五五〇年から五四〇年にかけてであろうか。その詩集を繙くに、

agathoi, esthloi, kakoi, deiioiとの対比が目を射る。通説的に言わんか、それらは貴族対平民にして、一方は称揚され他方は唾棄される。テオグニス時代にそれは潰乱したが、旧きメガラにおいては社会秩序が固定し、上下が懸絶していた。支配に与れるのは agathoi, esthloi のみにして、kakoi にとっては政治的、社会的上昇など慮外の事であったというものである。

テオグニデアの一部を額面通り受取ればそのような画像が出来するやもしれぬ。しかしながら、慨世のテオグニス、これは本来的にはモラリストである。それが社会的現実に触れた場合、痛憤を惹起する。それがために筆が奔り、誇張が生じたとも考えられる。狷介固陋なるテオグニスとしては戯画的、自虐的に詠ったのであろう。彼の詩作は何よりも文学作品であるから、それを現実と混同してはならないのである。テオグニス集を精細なる観察に付するに、上下の較差は説かれるほどのものではない。ギリシアのポリスに通有のところであるが、メガラにおいても、支配層は自己を閉鎖的身分として特化するまでには至らなかった。⁽³¹⁾ 旧きメガラにてはそのような階層が一定の勢威を保持したと見られる。かくなる体制の呼称としては寡頭政が適切であろう。それは一般的にも古期ギリシアにおいて優越する体制であった。もつとも、前述したように、民会が一定の存在感を示した事には留心すべきである。

三

テアゲネス自身に戻る。彼の出自であるが、テアゲネスはアテナイのキュロンと姻戚関係を結んでいたのであった。⁽³²⁾ 学説史においてはキュロンは「貴族」たりし故、テアゲネスも同身分に相違なし、⁽³³⁾ 或は少なくとも富有なるエリート層より発した⁽³⁴⁾ とおしなべて唱えられる。されど、キュロンには euses なる形容が付された⁽³⁵⁾ が、これは相対的名門の謂であり、それ以上ではない。⁽³⁶⁾ シキュオンのクレイステネスは元来的には小身の出かもしれぬが、⁽³⁷⁾ その息女アガリステの婚姻には名家の者が多数参集した。⁽³⁸⁾ 一般に、僭主として権勢を誇れば前身は忘却されるのである。

テアゲネスの素姓は伝承を欠く以上、不明とするより他はない。⁽³⁹⁾ もつとも、赤貧を詫つが如き身ではなかつたらうが。彼は將軍という事であつたから、⁽⁴⁰⁾ 有産者層に属したと見るのが普通であらう。

次に大衆的喝采を博した理由。再度、『政治学』五卷⁽⁴¹⁾。ここでメガラのテアゲネスは「富裕者が河畔にて家畜に草を食ませるところを抑えてそれらを屠殺し ton euporon ta ktene aposphaxas, labon para ton potamon epinontas」と伝えられる。⁽⁴²⁾これはアテナイにおけるペイシストラトスの平原派に対する党争、シユラクサイにてのディオニシオスのダブナイオスや富者に対する告発と同種の行為という。アリストテレスの思惟自体は明晰である。上流富裕層対民衆との対抗において上記三名は前者に対する民衆の敵愾心を煽った。その事によって民衆の味方となり he de pistis en he apechtheia he pros tous plousious⁽⁴³⁾、政権の顛覆に成功を納めたというものである。

問題は事実関係である⁽⁴⁴⁾。如上の引用文であるが、先ず、「河畔にて」とあった。然るに、現今のメガラにはその名に価する川は存しない。往時においては状況は異なつたのであろうか。⁽⁴⁵⁾ ta ktene はレゴンによらんか、主として、或は専ら羊である。⁽⁴⁷⁾何れにせよ、この頃貧富の対立が尖鋭と化していたのであろう。後出の palinokta⁽⁴⁸⁾をも勘案して、アッティカ同様、メガラにも農民の窮境を想定する向きもある⁽⁴⁹⁾。有産者による誅求が激化していたのであろうか。

メガラに関し毛織物業の發達は説かれるところである。この点を強調するのはユア⁽⁵⁰⁾である。メガラの土壤は穀作には適さず、毛織物業の殷盛は夙に七世紀に迄遡る。そうした製品をプロポンティス、シケリア方面に輸出し、見返りに穀物や原材料を得た。テアゲネスもまた産業家にして、自ら織物業の利益を独占せんがため、同業者の羊群を襲撃したのではないか。アリストテレスの富者とは産業家層に他ならぬとの由である。

ユアの学説は過度に及ぶ⁽⁵¹⁾が、その蹤跡を履む者必ずしも鮮少とはしない。⁽⁵²⁾もとより、独占云々などと主張するものではないが。レゴン⁽⁵³⁾は七世紀のメガラに一定の経済的發展を見る。そこには毛織物業隆昌に向い、貿易も徐々に増加した。それらに従事する者必ずしも多数とはしないが、それはメガラ社会に確實かつ深甚なる変化を將來した。その事は重装歩兵戰術導入⁽⁵⁴⁾と相俟って既存の秩序たる貴族政を動揺せしめた。貧民の不満も増大した。かくなる社会背景の下、テアゲネスは富者にとつての致富の源泉たる羊群を襲い、僭主政樹立に到つたとの事である。

メガラの毛織物製品は盛名を誇つた模様⁽⁵⁵⁾。犬儒派ディオゲネスの逸話も知られるところである。⁽⁵⁶⁾ただ、これらは五世紀末から四世紀

の状況を語るのみ。ユアなどの引証するテオグニス一八三—一八四は優生学上の常識に過ぎない。そこでは牡羊を驢馬、馬などと並記するのみ。織物は考古学的証拠を残し難き事もあり、アルカイク期メガラの状態については判然とせぬとしか言うべくもない。縮絨の技術はメガラ人ニキアスによって発明されたと伝えられるが、これも時期を示されるものではない。

メガラは植民地であるが、シケリアにおけるメガラ・ヒュブライアやプロポンティス方面のカルケドン、セリユンブリア、ピュザンティオンなど少なからぬ数に上る。開設の年代は八世紀後半から七世紀中葉にかけてである。メガラ人第一の目的は農地の獲得であつたろう。この事は黒海航路を扼する要衝たるピュザンティオンでなく、カルケドンやセリユンブリアが先占された事を以つても窺知される。黒海方面よりギリシア本土への穀物輸出が活発と化するのは五世紀に入つて後とされる。アルカイク期の経済構造全般を勘考するにつけても、レゴンとしては今少し慎重に歩を進めるべきではなかつたか。そもそも、レゴンなどはアリストテレスの一節(上記53ページ)に著大なる意味を賦与するものであつた。これもまた過度である。

アルカイク期の詩も、この間、利用されるかもしれない。そこには致富を肯定する、或は社会的流動を示唆する詩句が見受けられる。ここではアルカイオス E360. 364L-P. ヤソロン E6G-P=F15W. を挙げておく。ソロン自身、貿易に従事した事により喪われた財産を恢復したとも伝承されるのであつた。また、ヘシオドス『仕事と日々』四五、六一八—六九四も参考を供するところである。

テオグニスの詩には社会変動を知らしめるもの些少とはしない。一五五—一五八、一六五—一六六、五五七—五六〇、六五九—六六〇などにおいては貧民速やかに財をなし、富裕者一夜にしてすべてを失うなどと歌われるのである。その理由として、一つには貿易がある。一七九—一八〇、一一九七—一二〇二。貿易の成否によつて社会的階梯を昇つた者、或は逆に下降した者が存したのは慥かである。ただ、テオグニス集中、経済活動に関する作は少数を算えるのみ。三四—三五〇などは政争に破れて落魄した事を物語る。五三—六八、二八七—二九二なども政治的観点より把握すべきでないか。社会秩序が壊れたとするならば、それは政治的変動に基因するところ大なのであろう。僭主政、過激民主政、復活した寡頭政などによつてメガラ社会は追放、財産没収などの憂目に遭つたのである。更に、五三—六八や一八三—一九二、一九三—一九六などは相当の誇張、歪曲を含むものでもあつた。更に、メガラは支配層が本来的に脆弱なる事をも想出すべきである。上下の階層移動は旧くより稀ではなかつたであらうか。かくして、テオグニス集よりしても

経済的轉換の痕跡は看取し難い。七世紀後半に「貴族政の構造的危機」を措定する学説に与同する事は憚られる。

四

テアゲネスの国内政策としては唯一、泉の建設伝わるのみ。これが一義的に民衆の利を計るものでない事は言を弄するまでもない。それは諸人の必要を充足するためのものであったし、また、土木、建設事業は僭主の常套とするところでもあった。その点に階級的性格を臆度するのは戒むべき事であった。⁽⁷¹⁾

五

テアゲネスの失遂につき史料を遺すのはプルタルコス『ギリシアの諸問題』一八である。「メガラ人は僭主テアゲネスを放逐して、少時の間、政体に関して穩当であった。」これに踵を接して過激民主政の記述がなされるのであるが、「穩当」とはそれとの対比を意識して用いられた表現である。新たに成立した政体は穩健なる寡頭政と解すべきである。これの中心をなすのは、当然、有産者層である⁽⁷²⁾が故、テアゲネスに対する反撃が成功したわけである。⁽⁷⁴⁾

テオグニスには僭主に対する怨嗟の念強きものがある。一一七九―一一八二、一一〇三―一一〇六より、それは明瞭である。また、彼は三九―五二などにおいて僭主出現を危懼する。これは昔日の記憶に起因するのではないか。テオグニスもかつてそれに属したのであるが、上流エリート層は僭主によって財産没収などの難を蒙った可能性高しとなすべきであろう。⁽⁷⁵⁾

ペイシストラトスやキュプセロス、はたまたシキュオンのオルタゴラスは大衆的支持を背景として興起した。ただ、彼らは統治の任に当るに及んでは比較的穩和に行動した。土地再分配の如き矯激なる施策を執行した形跡はなく、上流階級をそれ自体としては敵視しなかつたと思考される。再三説いたように⁽⁷⁶⁾、彼らにとって至高目標は権力の永続であつて、そのために中庸の姿勢を持したのである。

政治的力量に長けていたわけである。その点、テアゲネスには至らざる憾みがあったか。僭主は知名の士に敵対するというアリストテレスの言を裏書する結果となったか。或はむしろ、それは暴政に墮したか。後出の *paionikia* を以って按ずるに、彼はソロンの如き貧富の対立を緩和せしめるが如き方策を施行しなかったとするのが合理的である。その施政が長期に及ばず、また彼がメガラ史に名を遺さなかったのはそこに由因するのであろうか。

六

穩健寡頭政⁽⁷⁸⁾に継起するのが過激民主政であった。プルタルコス⁽⁷⁹⁾の筆を以つてすると、民衆指導者^{デマゴゴス}はメガラ人に生の自由を注いでそれを墮落せしめた。彼らは富裕者 *plousioi* に対し氣随に振舞い、貧民 *penetes* は富者の居宅に侵入し、豪奢なる饗応を強要した。それを得られぬと、暴力的かつ傲岸に行動した。遂には利子返還 *paionikia* を決議して、かつて支払った利子を債権者より取戻した、という。

放縦なる民主政は『ギリシアの諸問題』五九⁽⁸⁰⁾にても語られる。神殿が劫掠された上に、ペロポネソスよりデルポイへの宗教使節がメガラにて溺死せしめられた。メガラの当局は無秩序のため犯人を処罰し得ず、代りにアンピクテュオネスが介入したという。

これらに関して、返還されたのは利子のみか、借財は如何したか、また何故に饗宴やアンピクテュオネス⁽⁸¹⁾のかなど諸々の疑問が生ず。それらは措くとして、ここに描出された状況は酸鼻を極める。貧民は富裕者に対し暴虐の限りを尽したというものである。その年代は七世紀末葉、或は六世紀前半であろうか。

メガラの民主政はアリストテレスも報告するところである。『政治学』1304b 34-39、「(ヘラクレイアと)類似してメガラ民主政も解された。何となれば、民衆指導者は財産没収をなし得べく知名の士 *gnorimoi* を多数放逐した。遂に追放された者が多数と化し、これらは帰国して民衆と戦い、勝利して寡頭政を樹立したのである。」同書 1302b 30-31、「メガラ人の民主政も無秩序と無政府状態のために敗北を喫した折、崩壊した。」今一箇所、1302a 17-19、「メガラにおいて俱に帰国し民衆と干戈を交えた者より(役は選任された)。」

これらは前記ブルタルコスの放埒なる民主政と同一の事例を指す。⁽⁸⁴⁾ アリストテレスとブルタルコスの両名、概念、分析方法を同じくする。彼らが口にするのは常に富有層⁽⁸⁵⁾対貧民や寡頭政であり、民衆指導者の跋扈である。「貴族身分」や「平民」など介在の余地がない。貧者にとつて借財は深刻の度を増していたのであろう。それにしても上の如き無法なる政体は長期間持続するものではない。有産者の反撃が奏功し、再度寡頭政が成立した。アリストテレスの叙する通りであらう。⁽⁸⁶⁾ これの中核をなしたのは財産を没収されて流謫の身にあった者である。役職はこれら民衆と戦つた者より選任されたのであつた。然らば、これは一味徒党の政権となり、鞏度の寡頭政と化す。このような体制は長期間持続するものであらうか。⁽⁸⁷⁾

ここでまたもやテオグニスなるが、彼の詩には寡頭政の時期に生を送つた事を指示するものがあつた。⁽⁸⁸⁾ 政争の存在も知られるのであつた。⁽⁸⁹⁾ 彼は財産を略取した者に対し曠患の炎を燃やすのであつた。彼は亡命の辛酸を語るにも倦まない。⁽⁹¹⁾ 自身、それを嘗めたのである。これらよりせんか、メガラの実態は紛々擾々たるものがあつたのではないか。爾後、五世紀後半に至る迄、国制変革を報ずる史料は欠如するのではあるが。⁽⁹²⁾

七

メガラはペロポネソス同盟に加入しているが、それは六世紀後半の事であらうか。該時期の国制は寡頭政と見るのが自然である。五世紀に入ってその六〇年代末葉、メガラはアテナイと同盟関係を締結するに至つた。境界紛争でコリントスに征圧されたが故である。⁽⁹³⁾ この時、民主政への転換が説かれる事もある。然る後、四四六年にはアテナイより離叛している。⁽⁹⁵⁾

ペロポネソス戦争に入って、四二四年には寡頭派の革命が生じている。⁽⁹⁶⁾ これより先四二七年にはプラタイアがペロポネソス同盟軍に降服した。その地は約一年間メガラよりの内乱亡命者の居住地たらしめられたという。⁽⁹⁷⁾ 然らば、これを遡る事何年かにおきてメガラでは民主政への転変が生じていた事となる。それが、アルキダモス戦争酣むなる四二四年に打倒されたのである。戦争の帰趨とも関連して、寡頭派と民主派の対立が激化していた。国柄を乗つた寡頭派としては反対派約百名を処置し、極端なる政治を布いた。この政

変は極めて少数の者によってなされたのであるが、非常なる長期間持続したという。⁽⁹⁸⁾

ペロポネソス戦争終結から四世紀にかけてのメガラ国制史については各説交錯する。コリントス戦争期に民主政に変転したとも説かれるし、⁽⁹⁹⁾その後にも不穏なる動きは聞かれる。⁽¹⁰⁰⁾

八

以上を以って顧るに、メガラにおいても国制の変転は頻々として熄む事はない。ポリスにあつて宿痾ともいふべき貧富の亀裂は深く、それは遂に修復されなかつた。メガラは一人のソロンをも産まなかつた。寡頭政、民主政と国制は永劫に回帰するのみか。そこに何程の発展があつたのか。僭主政は国家、社会にさしたる刻印を捺さず。ここにおいても僭主政は一挿話に過ぎなかつたか。

註

- (1) Eusebios, *Chron.* I, 198.
- (2) オリュンピアの優勝云々は Hdt. V, 71.1 にても語られる。テアゲネスに関して報ずるのはトゥキユデースと、また Pausanias, I, 28.1, 40.1.
- (3) Cf. R. P. Legon, *Megara*, Ithaca and London, 1981, 102, n. 34. レコンは漏脱の可能性をも考量する。
- (4) 1305a, 24. 『政治学』五巻五章は後述。
- (5) 芝川治『ギリシア「貴族政」論』、晃洋書房、二〇〇三年、九四―九五ページ。同「バイシストラトスの僭主政」、『大手前大学人文科学部論集』六号、二〇〇五年、九〇―九一ページ。
- (6) Cf. Legon, *op. cit.*, 61-62.
- (7) Cf. *Suda* s. v. Dios Korinthos.
- (8) 三九―五二、九四七―九四八等。詳細は芝川、前掲書一一八ページ。
- (9) それにしてもディオニュシオスは往古に属すのか。cf. R. Weil, *Aristote et l'histoire*, Paris 1960, 350.
- (10) 本篇註(17)。

- (11) 後述53ページ。
- (12) J. Labarbe, Les premières démocraties de la Grèce antique, *Bulletin de la Classe des Lettres de l'Académie Royale de Belgique* 58, 1972, 239-242.
- (13) *Pol.* 1305a 18-20, *cf. ibid.* 1310b 17-18 は齟齬を呈しなく。
- (14) 以上の点は芝川、前掲書一七〇一八ページにて詳叙した。
アリストテレスにおける国制継起の理論並びに事実関係をめぐっては、同書七五三ページ。
- (15) *Pol.* 1310b 18-31.
- (16) 民主政下のデミウルゴス、テオロスよりの僭主出現 (*ibid.* 1310b 21-22) *cf. ニューマン* (W. L. Newman, *The Politics of Aristotle* IV, Oxford 1902, 417) は疑問を挟む。
- (17) そうすると五巻五章 1305a 17-18 におけるミレトス云々は五章の旨趣とは撞着を生ずる事となる。
昔時のシケリアにおいて殆ど大多数の寡頭政が僭主政に変移したとはアリストテレスの伝える (*Pol.* 1316a 34-36) ところである。
- (18) 『政治学』1310b 15において民衆指導者が論及されるが、これとの連想が作用したのであろうか。
- (19) *Pol.* 1316a 34-37.
- (20) *Hdt.* V. 92B.
- (21) 芝川、前掲書五七ページ。
- (22) *Pol.* 1304a 27-29, *cf. ibid.* 1306a 1-2.
- (23) *Cf. Pol.* 1316a 34-39, 1286b 8-22.
ここでは細論には及ばぬが、アリストテレスにおける僭主政の歴史的位位置設定解明は容易ならぬものである。既に詳叙した(芝川、前掲書七一三ページ)ように彼の国制継起理論は夥多の難点を内包する。
- (24) 1, 433.
- (25) パシレウスはIG VII 1-14. これら碑文の年代は三二〇―三〇〇年頃。アイシムナタイはIG VII 15. これはベルガモンのエウメネス二世(一九七―一五九)の時。
- (26) K. Hanell, *Megarische Studien*, Lund 1934, 149-160.
- (27) 註(25)及び(26)。
- (28) Hanell *op. cit.* 146.
- (29) *Ibid.* 147. 部族や hekatostyes に関しては論及の限りでない。
- (30) レコン (*op. cit.* 56) はアイシムナタイを aristocratic council と看做し、それが国制の中核を占めていたかに語る。しかし、これは該時期のメガラを無条件的に「貴族政」と措定するところから発するものである。
- (31) 詳密なる議論は芝川、前掲書五章。
テオグニス集については文献学上の問題が、許多、存する。それは単一の詩人による作のみを収録するものではないし、従って、制作年代も

- 長期に及ぶ。そのため、時に詩中に矛盾が生じる。
なお、*agathoi* なしをめぐっては註 (36) をも参照。
- (32) 本稿48ページ。
- (33) E. g. S. I. Oost, *The Megara of Theagenes and Theognis*, CP 68, 1973, 188.
- (34) F. Schachermeyr, *Theagenes 2*, RE 2 Rheie V A, 1934, 1341.
- (35) 本論文48ページ。
- (36) *eugeneis* は *gnorimoi* などと並んで、後世の例えはアリストテレス、ディオドロス、プルタルコス等において、同時代人に対して普通に使用される語である。また Hdt. V. 71.1 の *hetaireien* 及び Thuk. I. 126.5 の *philous* は単に一味徒党を意味するのみ。以上、贅言ながら念のため。
- (37) 芝川「シキユオンの僧主政」、『大手前大学論集』一四号、二〇一三年、三三三-三四ページ。
- (38) Hdt. VI. 126-130.
- (39) Cf. Ar. *Pol.* 1310b 12-14.
- (40) 本論文50ページ。
- (41) サラムス島をめぐってメガラとアテナイは長期に及んで抗争を繰広げた。ソロン介入以前にはメガラが優勢を保ったという (Plut. *Solon* 81)。この角逐の中でテアゲネスが頭角を現した可能性も排除は出来ない。cf. Legon, *op. cit.* 101. 更に、清永昭次「Theagenesの支持者層」(『学習院大学文学部研究年報』三四、一九八七年)、一二ページ。
- (42) *Pol.* 1305a 24-26.
- (43) *Ibid.* 1305a 22-23.
- (44) 畜群攻撃と護衛兵取得との前後関係をめぐっても論議はある。cf. Legon, *op. cit.* 96-97. 何れが先行するか、測度する術もない。
- (45) Oost, *op. cit.* 190.
- (46) Legon, *op. cit.* 88.
- (47) 清永(前掲論文「三二-三四ページ」)は *epinemontas* に関し、Liddell-Scott の与える訳語の「*turn one's cattle to graze on another's land*」を探る (cf. Newman, *op. cit.* IV. 342)。富裕者は他人の土地にて彼らの畜群を飼養したという事で、それはポリスの公有地か「平民」の私有地かなどと議論を展開する。後者であればそれは違法行為であり、前者とせんか、公有地の共同利益権独占により貧民が排除された事となる。これは一般の農民、牧人にとって喫緊の課題であったというわけだ。cf. S. Link, *Landverteilung und sozialer Frieden im archaischen Griechenland*, *Historia*, Einzelschriften 69, Stuttgart 1991, 131.
- (48) 本稿56ページ。
- (49) E. g. Legon, *op. cit.* 115-116.
- (50) P. N. Ure, *The Origin of Tyranny*, Cambridge 1922 (Reprint, New York 1962), 264-267.
- (51) 芝川「コリントスの僧主政」三九ページ。

- (52) E. g. Ost, *op. cit.* 186-188.
- (53) Legon, *op. cit.* 86-96.
- (54) りれきぶくじは芝川「コリントスの僭主政」三八-三九ページ。
- (55) Aristoph. *Ach.* 519; *Par.* 1003; *Xen. Mem.* II. 76.
- (56) Diogenes Laertios, VI. 41.
- (57) *Ure. op. cit.* 266.
- (58) Krious men kai onous dizemetha. Kyrne, kai hippous eugeneas ktl.
- (59) C. G. Starr, *The Economic and Social Growth of Early Greece, 800-500 B. C.*, New York, 1977, 66.
 ナチン (*op. cit.* 90-91) は都市域拡大を説くが、これは現段階においては発掘よりは証されない。テアゲネスによる泉の建設(後述55ページ)はそれを示すものではない。
- (60) Plinius, *Naturalis Historia* VII. 196. プリニウスの筆は伝説的に傾く。
 Link, *op. cit.* 129 よりすれば、上層の財産は必ずしも羊を中心とするものではない。
- (61) Cf. Hdt. IV. 1442.
- (62) Starr, *op. cit.* 165; T. S. Noonan, *The Grain Trade of the Northern Black Sea in Antiquity, AJP* 94, 1973, 231-242. cf. Legon, *op. cit.* 86-87.
- (63) E. g. A. Snodgrass, *Archaic Greece*, London 1980, 123-159.
- (64) *Plut. Solon* 2.1.
- (65) 以下、テオグニスに関しては芝川、前掲書一一五-一一八ページに精叙した。ただ、そことは若干ニュアンスを異にする。
- (66) 後述57ページ。
- (67) 本稿52ページ。
- (68) 同右。
- (69) Pausanias, I. 40.1, 41.2.
- (70) 清永、前掲論文一六-一七ページ。
- (71) 芝川「シキュオンの僭主政」三九ページ。
- (72) *Mor.* 295C-D.
- (73) レゴン (*op. cit.* 112-114) はこの政体の支配層につき論議を展開するが、それは想像力過多の誹りを免れ難い。テオグニスの場合、詩作品と現実の事件を直接関係せしむる事は困難なのである。芝川、前掲書一二四ページ註(15)。
- (74) テアゲネス失脚の一因としてキュロン援助の失敗を言挙げする者もいる。Legon, *op. cit.* 101-102.
- (75) 現に畜群を襲撃されている。前述53ページ。

- (76) 芝川「ペイシストラトスの僭主政」九六ページその他。
- (77) *Pol.* 1210b 12-14.
- (78) これは「少時 oligon chronon」と記されるのみであったが、何年程度持続したのであろうか。
- (79) 註(72)。
- (80) *Plut. Mor.* 304F-F.
- (81) Cf. T. J. Figueira. *The Theognidea and Megarian Society*. Figueira and G. Nagy (eds.), *Theognis of Megara*. Baltimore and London 1985. 147-148.
- (82) Cf. *ibid.* 132.
- (83) Cf. *Legon. op. cit.* 132-133.
- (84) 芝川「前掲書一四一五ページ」。プルタルコスがアリストテレス学派の『メガラ人の国制』に依拠するとは少なからず主張されるところである。cf. K. Giesen. *Plutarchs Quaestiones graecae und Aristoteles' Politen*, *Philologus* 60, 1901, 461-463; W. R. Halliday, *The Greek Questions of Plutarch*, Oxford 1928 (Reprint, New York 1975), 92, 95, 99-100, 219.
- (85) 『政治学』1304b 37 の *gnorimoi* にひいては芝川「前掲書三二ページ」、註(32)。
- (86) 『政治学』1302b 31 の *hettention* は民衆派が帰国を計る富者に敗れた事を意味すると解されよう。プロボンテイスのペリントスにおいてメガラ人はサモス人に敗を取った。この年次はメガラの内政に置かるべきやもしれぬ。芝川「サモス国制史の一断面」、『大手前大学論集』一五号、二〇一四年、一〇ページ。
- ソロンの際、アテナイはサラミス島の奪還に成功した (*Plut. Solon* 89)。この敗戦がメガラの内政に影響を与えた可能性はある。もっともこの件やペイシストラトスのニサイア占領をめぐっては諸種の伝承が錯綜し、正確なる過程を再構成するのは難業に属する。cf. *Legon. op. cit.* 125-129, 136-137; Figueira. *op. cit.* 280-286.
- Dorykleioi (Pausanias, I. 40.5) はメガラの裏切者であるが、この事はそこにおける内訌の存在を物語る。cf. *Aeneas Tac.* IV. 8.
- (87) Cf. *Thuk.* IV. 744.
- メタム (*op. cit.* 140, 236) はこの体制が安定したと見る。
- (88) 芝川「前掲書一六二一六ページ」。
- (89) 三九一五二、二一九二二〇、八二一八一四。また、本篇54ページ。
- (90) 同右54ページ。財産没収云々は二一九七一一二〇二などと牴牾を来す如きであるが、これに関しては註(31)。
- (91) 二〇九二二〇、三三三三三三四他。
- (92) ヘラクレイアでは民主政が植民後、時日を経ずして解体されたという (*Ar. Pol.* 1304b 31-32)。これは黒海沿岸のヘラクレイアであり (芝川「前掲書一五ページ」、それはメガラ植民地であった。開設年代は五六〇年頃である。この事は寡頭政下のメガラから不平分子たる民主派を送致した事を意味するものかもしれない。或は逆に、当時、メガラが民主政たりし事を示すとの解釈もある。cf. *Newman. op. cit.* IV. 337, *Thuk.* I. 103.4. メガラにとってポリントスとアテナイなる強大なる隣邦の存在は宿命的なものであった。
- (93)

- (94) L. Whibley, *Greek Oligarchies*, Cambridge 1896, 84. ἄτιμον (*op. cit.* 183) はこれを否定する。
- (95) Thuk. I 114.1.
- (96) *Ibid.* IV. 74.
- (97) *Ibid.* III. 68.3.
- (98) トゥキディデースの使用する語はアオリスト *xyneneimen* であるからして、彼がこの箇所を執筆した時点において如上の寡頭政は倒壊していたものと考へられる。cf. Platon, *Kriton*, 53B, ἡτοιχισθησὶν αὐτῶν τὸ μέγαρον εὐνομουνταίησινとなされている。これは穩健寡頭政を意味するものである。
- (99) E. Meyer, *Megara*, *RE* XV 1, 1931, 192.
- (100) Diod. XV. 40.4. *μεγαλὴ* Dem. XIX. 295.